

PRAEVIDENTIA DAILY (10月24日)

昨日までの世界：量的緩和縮小後退というよりリスクオフ的

昨日は、前日の雇用統計後の米長期債利回り大幅低下に出遅れていたドル/円が大幅に下落した一方、世界的に株価が反落する中で、豪ドルやNZドルは前日の上昇分を帳消しにして反落するなど、米国の量的緩和縮小開始観測の変化というよりは、株安を受けたリスクオフという側面が強い展開となった。

ドル/円は、米長期債利回りが前日よりはやかながら低下が続く中で、日本や中国の株安もあってドル安が加速し、先週金曜の安値である97.56円を下回り一時97.16円へ下落した。

豪ドルは、朝方発表された豪3QCPIが総合で前年比+2.2%、コア指数の一つである刈込平均が+2.3%といずれも市場予想(各々+1.8%、+2.1%)を大幅に上回ったことからRBA利下げ期待が更に後退するかたちで続伸、対ドルで一時0.9756ドルに達した。もっともその後は、中国人民銀による短期金融市場における流動性逼迫放置を受けた短期金利上昇が金融引き締め観測に繋がり、中国株価が大きく下落したことを受け急反落、前日の雇用統計前の水準である0.9660ドル程度も下回り、NY時間入りにかけて米株価も企業決算への懸念などから反落したことから、一時0.9607ドルへ続落した。

欧州通貨では、ポンドが特段の直接的材料は見当たらない中で欧州時間入りにかけて豪ドルなどと同様に急落したが、ユーロは欧州時間に一時的にポンドなどの下落につれるかたちで軟化したがその後持ち直し、前日引け値からほぼ横ばい圏内に戻っている。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米2年金利差	米2年金利	日2年金利	米10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-0.8	+0.02	+0.02	+0.00	+0.00	-0.01	-0.01	-0.5	-2.0	-1.0	-2.1
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西伊の対独格差
ユーロ/ドル	-0.0	-0.01	+0.01	+0.02	-0.02	-0.03	-0.01	-0.9	-0.5	-2.1	+0.01
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	-0.4	-0.04	-0.02	+0.02	-0.03	-0.04	-0.01	-0.3	-0.5		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
豪ドル/米ドル	-0.9	-0.08	-0.06	+0.02	-0.11	-0.12	-0.01	-0.6	-0.5	-1.2	-1.0
	変化率	NZ米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
NZドル/米ドル	-1.4	-0.05	-0.03	+0.02	-0.03	-0.04	-0.01	-0.6	-0.5	-1.2	-1.0
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	世界株価	米株価	原油WTI	CRB
米ドル/加ドル	+0.9	+0.08	+0.02	-0.06	+0.04	-0.01	-0.05	-0.6	-0.5	-1.0	-1.0

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

きょうの高慢な偏見：Fedから人民銀へ

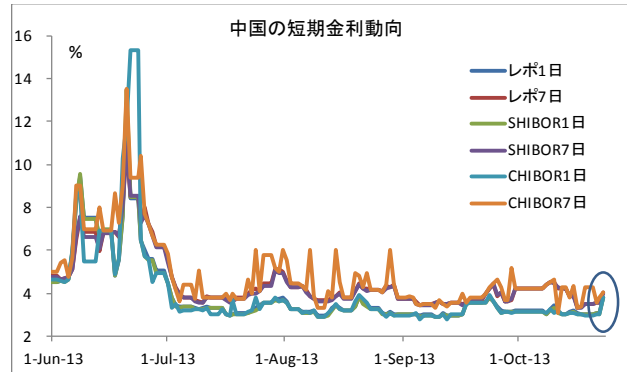
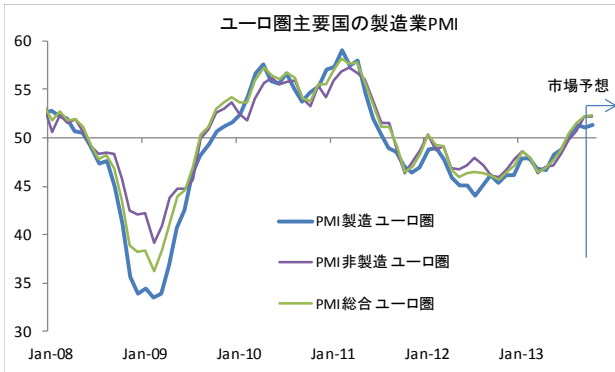
本日の相場材料としては、①中国10月HSBC製造業PMI速報(10:45、前月50.2、市場予想50.4)、②ユーロ圏10月製造業PMI速報(17:00、製造業分は前月51.1、市場予想51.4)、③Costaポルトガル中銀総裁発言(17:00)、④米8月貿易収支(21:30、前月-391億ドル、市場予想-395億ドル)、⑤米新規失業保険申請件数(21:30、前週35.8万件、市場予想34.0万件)、⑥Carney・BoE総裁発言(1:45)、などが予定されている。

雇用統計だけでは判断できないが、足許市場では米国景気の回復が緩慢で量的緩和縮小が遅延する、との認識が広がっている中で、中国や欧州のPMIが更なる改善を示すと、相対的な景況感から米ドルに対して豪ドル、NZドル買い、ユーロ買いに繋がり易いだろう。特にユーロ圏PMIでは、製造業分が先月、51.4から51.1へ悪化していたため、今回再び市場予想通りに51.4へ回復するかが焦点となり、低水準ながら回復継続が示されると、堅調を維持しているユーロ/ドルの続伸に繋がり易いとみられる(下図を参照)。

他方、中国では、PMIの改善が続くかに加えて、最近市場の懸念が再び高まっている短期金利上昇が続かないかも注目される。昨日は中国短期金利が7月以来の大幅上昇と報道されているが、水準的には翌日物~1週間物で概ね4%前後と、今年6月下旬に10%超へ上昇し、当時起きていた世界的なエマージング通貨安・リスクオフに火に油を注いだ状況とは現在のところ比べ物にならない(下図を参照)。但し今後年末にかけて上昇傾

向が続くようだと、中国金融機関や不動産市場に追加的なストレスとなり、中国経済の減速懸念が再燃するリスクがあるだろう。

ドル/円は量的緩和縮小遅延の織り込みと米長期債利回りの低下がどこまで続くのかが焦点となり、97 円丁度方向への軟化継続バイアスがある。もっとも、昨日は米株安もあって米 10 年債利回りは一時 2.47%へ低下したが、引けにかけては 2.50%へ持ち直し前日比横ばいに留まった中で、中国の短期金融市場と株価における不安定が沈静化すれば反発の可能性も出てくる点にも注意が必要だろう。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、全てお客様ご自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。

当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。

当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。